

薬剤師のモラルディレンマと倫理教育の重要性

下堂 蘭 権 洋

Moral Dilemmas of Pharmacists and the Importance of the Ethical Education

Yoshihiro SHIMODOZONO

Department of Clinical Pharmacy and Pharmacology, Graduate School of Medical and Dental Sciences,
Kagoshima University, 8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8520, Japan

新たに始まった薬学6年制教育の薬学教育モデル・コアカリキュラムにおいて、薬学部学生は全学年を通じてヒューマニズムについて学ぶこととなっている。その中では、生命の尊厳を学び、医療の担い手としての心構え、あるいは医療における薬剤師の使命について学ぶことになる。また、医療現場での実務実習におけるモデル・コアカリキュラムにおいても、医療の担い手である薬剤師の倫理規範を遵守することを到達目標に、倫理に関して学ぶこととなっている。

一方、医療の現場で働く薬剤師は、“医療の倫理”、あるいは“薬剤師としての倫理観”といった言葉で言い表される倫理観を持って、あるいは理解して日常の業務に向かい合っているはずではある。

ところが、患者に接し、医薬品を管理するといったごく普通の業務を行っている時、何も意識していない、すなわち、これを倫理観が欠如していると言うかもしれない。あるいは、独りよがりですべてで対処しているかもしれない、すなわち、これを思い込みの倫理観で対処していると言うかもしれない。そして、業務においてこれから対処することの倫理観を問われたとき、判断に迷うという“モラルディレンマ”に向かい合うことも少なくないのではないだろうか。

医療現場で働く薬剤師にとって、あるいは薬学部学生にとって、最善の選択ができる判断力を養う“倫理教育”は必要不可欠であるが、はたして十分と言えるだろうか？

薬学教育において、これから薬剤師となっていく

学生の精神的なバックボーンとなる倫理教育に、もう少し理解や関心を持ってもらいたいのではないと思うのは筆者だけではないと思う。決して倫理に関する専門家や教員を増やすというわけではなく、教育に当たる者すべてが、“医療の倫理”、あるいは“薬剤師としての倫理観”について考え、教育を受けていく中でおのずとこのことが身に付くようにできないものであろうか。

筆者は、九州地区の認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ（WS）にタスクフォースとして参加する機会を得ている。その際に学習の目標、方略、評価を考えるときのテーマの1つとして「医療倫理と薬剤師」が挙げられる。WSには現場の保険薬局や病院勤務の薬剤師が参加しており、このテーマで検討を始めるグループは、改めて医療倫理のことを問われると、日常において「倫理」という言葉になじみがないために、多くは戸惑うこととなる。そして、このグループの議論はなかなか進まず、タスクフォースの苦勞するところとなる。医療人として、あるいは薬剤師として患者とどのように向き合えば患者の気持ちや言動に共感できるか、さらには薬剤師として医薬品を取り扱うときには法的な規制のもとに取り扱っているが、法を遵守するということはどういうことなのか、などを助言することによって議論の口火を切ることがある。このような経過をみていると、参加者は、薬剤師としての倫理観を持ち合わせているが、日常の業務の中では特別に意識していないように思える。そして、学生の時に体系的、いや体に染み込むような倫理教育を受けていないために、日常の医療の現場において各自が倫理観を徐々に培っていかざるを得ないのが現状ではないだろうか。このことはすなわち、誤った、あるい

は独りよがりの倫理観を持ち合わせてしまうことになるかもしれない。

すでに始まった新たな薬学教育の中での倫理教育は大学ごとにまちまちであり、身体障害者施設、老健施設やターミナルケアでの見学や体験、薬害患者からその状況を語ってもらう、身体的に障害を持つことを擬似体験する、など多くの取り組みが実践されつつある。このような経験を増やし、患者や社会的に弱い立場の人のことを考えることのできる薬剤師となるように教育することは重要であろう。そして、これらの経験や話を聴いて、芽生えてくる倫理観を理解し、考えさせるだけでなく、その倫理観を

持ち続けていくことの大切さも併せて教育することも重要なことであろうと考える。ましてや、人間としての倫理観の欠如がみられる現代社会において、倫理教育はこれまで以上に重要であると言わざるを得ない。

このたび、日本薬学会第128年会のシンポジウムにおいて、薬剤師倫理について考える機会を得られたのは、まさに社会からの、そして新たな教育制度で教育される薬剤師に対する要請であるかも知れない。シンポジウムでご講演いただいた皆様に、誌上において熱のこもった話を再現していただき、多くの方々にご紹介するものである。